

# 茗ヶ山遺跡

## 発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第136集



2004

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



み ょう が や ま い せ き

# 茗ヶ山遺跡

## 発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第136集

平成16年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





調査区全景（東から）

# 序

本書は、財團法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、若ヶ山遺跡の調査成果をまとめたものです。

若ヶ山遺跡は山形県の北西部に位置する松山町に所在します。松山町は山形県内を貫流する最上川が庄内平野に流れ込み、大きく北方に蛇行する右岸側に発展した城下町で、江戸時代庄内藩酒井氏の隠居地として知られた所です。

この度、平成15年度中山間活性化ふるさと支援農道整備事業の伴い、緊急発掘調査を実施しました。

若ヶ山遺跡では、自然に埋没した谷の跡が三条確認され、谷の埋没層からは平安時代の土器片や、縄文時代の土器、石器が出土しました。埋没谷は本遺跡が立地する地形が形成する過程で、集中豪雨により斜面が削り取られた痕跡と考えられます。埋没層からの出土遺物は谷の上方に営まれた集落か、作業に来た人々が置いていた生活の道具類と思われます。縄文時代の人々が狩猟、植物採集で本遺跡に、平安時代の人々は、開墾による畠地開発や、採集で一時的に営みを行なった場所と推測される。山の尾根に近い所での生活が認められたことは、興味があるところです。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史のなかで創造し、育んできた貴重な国民の財産といえます。この祖先の足跡を学び、将来へと伝えていくことが私たちの重要な責務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財團法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村宰

## 例　言

- 1 本書は、中山間活性化ふるさと支援農道整備事業に係る若ヶ山遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、調査説明資料などの内容より優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県農林水産部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査要項は以下のとおりである。

遺　跡　名　　若ヶ山遺跡

遺　跡　番　号　平成14年度登録

所　在　地　　山形県飽海郡松山町大字若ヶ沢字若ヶ山345番地　他

調　査　主　体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

理　事　長　　木村　宰

受　託　期　間　平成15年4月1日～平成16年3月31日

現　地　調　査　平成15年7月1日～平成15年8月29日

調　査　担　当　者　調査第一課長　野尻　侃（調査主任）

主任調査研究員　黒坂雅人

調　査　員　　渋谷純子

- 5 本書の作成、執筆、遺物写真撮影は野尻　侃が担当した。

- 6 委託業務は以下のとおりである。

航空写真測量業務　シン技術コンサル

- 7 出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。

- 8 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の機関、個人の方々からご協力、ご助言を戴いた。

記して感謝申し上げる。

山形県農林水産部、山形県庄内支庁経済部酒田農村整備課、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、  
庄内教育事務所、松山町教育委員会、佐藤慎宏、植松芳平（敬称略・順不同）

## 凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。

E P ピット S X その他の遺構・性格不明遺構

R P 登録土器 R Q 登録石製品

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（日本測地系）により、高さは海拔高で表す。

4 本文中の遺物番号は、遺物実測図・写真図版ともに共通とした。

5 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2002年版農林水産省農林水産技術会議局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

# 目次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 周辺の遺跡	3
III 遺跡の概要	
1 遺跡の層序	5
2 遺構と遺物の分布	5
IV 出土遺物	
1 平安時代の土器	10
1 縄文時代の石器	10
V まとめ	
1 遺構	13
2 出土遺物	13
3 総括	14
報告書抄録	卷末

## 表

出土遺物観察表	12
---------	----

## 図版

第1図 茗ヶ山遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 茗ヶ山遺跡概要図	4
第3図 調査区概要図	6
第4図 遺跡の層序	7
第5図 SX 1・2・3性格不明遺構	9
第6図 出土遺物（縄文土器・石器）	11
第7図 出土土器（須恵器・赤焼土器）	12

## 写真図版

卷頭写真 調査区域全景（南から）	
図版 1 調査区近景・作業風景	
図版 2 実掘状況・遺跡の層序	
図版 3 赤焼土器集中出土状況・遺跡包含層・風到木痕	
図版 4 出土土器状況（RP 1～8）	
図版 5 遺物出土状況・赤焼土器・須恵器	
図版 6 出土遺物（縄文土器・石器）	

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

松山市街地を望む東側の丘陵には現在まで文化財の存在は確認されていない。この地域に、平成15年度中山間活性化ふるさと支援農道整備事業が庄内総合支庁酒田農村整備課で計画された。事業実施に当たり、酒田農村整備課では事業区域内での文化財の所在について県教育委員会文化財保護室へ照会し、遺跡詳細分布調査の依頼を行った。依頼を受けた保護室では事業計画の聽取と、試掘による遺跡確認調査を行うため、平成14年10月23日から25日にかけて試掘調査を実施した。その結果、事業実施予定区域内に一箇所の埋蔵文化財包蔵地の存在が確認され、文化財保護法による手続きが必要との結果を酒田農村整備課へ報告した。報告を受けた酒田農村整備課では、既に事業実施の工事を進めていることから記録による保護を図ることと要請しました。のことから、保護室では発掘調査の実施を財団法人山形県埋蔵文化財センターへ依頼し、センターでは調査体制の見直しと共に、現地の状況確認、調査計画の策定等をおこない、平成15年7月1日から8月29日までの調査期間として開始した。

## 2 調査の方法と経過（第1回）

平成15年6月25日、当事業にかかる遺跡発掘調査の打ち合せ会を開催して最終協議を行い、7月1日から現地調査を開始した。調査は、当初事業予定区域内に存在していた雜木等の清掃、重機による表土除去から始め、杉根の手作業による抜根、面整理、遺構確認等の作業を進めた。その後、調査区のグリッドを国土座標の平面直角座標系第X系： $X = -124132.105$ ， $Y = -74668.964$ を測点KE4-1Lとし、測点KE4-1Rを $X = -124161.668$ ， $Y = -74674.625$ を基準点網図の線とし、両測点から座標を5m方眼で調査対象区域1,160mに木杭を設置した。グリッドの帰属は北西隅の杭を基準とし、番号は原点から西から東へアルファベットで、A、B、C・・・とし、北から南へは、アラビア数字で0,1,2,・・・と順に呼称し「A-1」のように表記した。遺構番号については、検出順に付し、番号の前に遺構（S）の種別を現す記号を付した。たとえば竪穴住居跡はST、掘立柱建物跡はSB、土坑はSK、溝跡はSD等に呼称した。調査の過程では遺跡が立地する丘陵の尾根が起因する埋没谷や、風倒木痕、ピット等が確認され、順次写真や記録を取りながら調査を行った。遺跡の面整理では遺物包含層となる第Ⅲ層の暗褐色土層中に平安時代の赤焼土器や、須恵器を確認、また、遺跡南部では縄文土器片が集中して出土した。

また、北から南にかけて三条の黒色土に覆われた埋没谷が確認され、第Ⅱ層の黒色土から縄文土器片が出土した。8月28日には事業実施関係者と松山町教育委員会、文化財保護室による調査成果の報告会を開催し、翌29日に調査を終了した。



第1図 茗ヶ山遺跡と周辺の遺跡

1 茗ヶ山遺跡（縄文・平安時代）

2 下耕山遺跡（江戸時代）

3 岡畠遺跡（縄文時代後期）

4 石名坂遺跡（縄文時代後期）

5 松山城跡（江戸時代）

6 砂山遺跡（縄文時代後期）

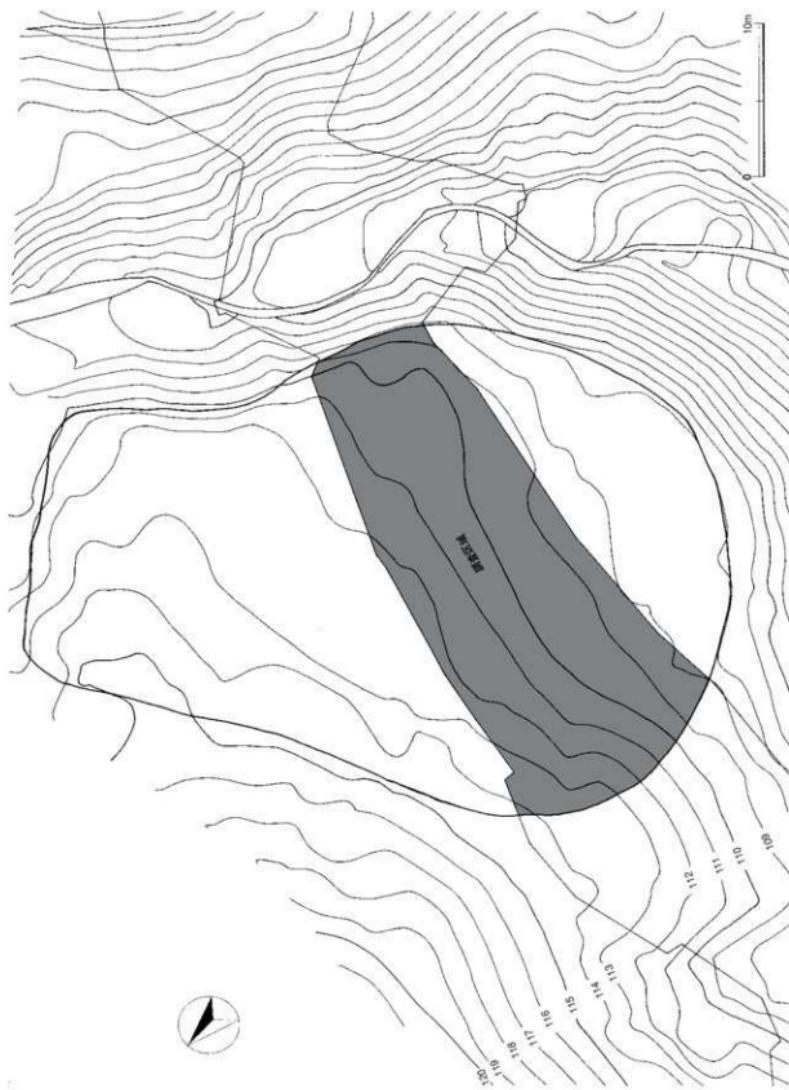
## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境（第2図）

本遺跡が立地する地形概観は、山形県が実施した国土調査の土地分類基本調査（酒田）によれば、地勢では東部に本県を内陸と庄内とに2分している出羽山地が南北に横たわり、西部には広大な庄内平野が位置しており、最上川が内陸と庄内を貫流して日本海に注ぎ込んでいる。遺跡が所在する地勢は、月山をはじめとする出羽三山から伸びる出羽山地の北端に立地し、北端部は最上川が庄内平野に注ぎ込む力によって分断されている。また、先端は相沢川により侵蝕され、独立した丘陵地帯となっている。地形分類では、松山丘陵と呼称され、松山町松嶺の市街地の後方の丘陵で、標高の最高点は300mを越える。松山丘陵の北東縁は田沢川の側方侵蝕を受けている。遺跡はこの丘陵の起伏の激しい頂部に位置し、丘陵表面には明褐色の腐植土層が乗り、地山は黄褐色の含砂礫粘質土である。本遺跡の標高は、110m前後を測り、地目は山林、雜木地となり、戦前には畑地として開墾が行われていた。

### 2 周辺の遺跡（第2図）

松山町には、25箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており（平成15年5月現在）、県埋蔵文化財遺跡地図に記載登録されている。本遺跡は、平成14年度に実施された遺跡詳細分布調査によって確認された遺跡である。本遺跡が立地する丘陵上は遺跡の存在を確認する調査は実施されておらず、地形状況からの判断ではかの地点に遺跡が存在する可能性が窺える。今後の遺跡分布調査に期待したい。第2図には周辺の遺跡を提示した。丘陵上には原始・古代の遺跡は所在せず、丘陵東斜面に松山市街地が広がる。市街地は江戸時代庄内松山藩であった酒井家の隠居所として城域を整備されたものである。市街地の西側は相沢川や最上川によって形成された肥沃な沖積地が広がり、水田となっている。砂丘地となる徳田山地区の西斜面には3の岡畠遺跡、4の石名坂遺跡が所在する。時期は縄文時代後期の集落跡である。また、砂丘地の北東の水田地域には昭和60年5月から8月にかけて県営ほ場整備事業（内郷地区）にかかる下餅山遺跡の緊急発掘調査が実施されている。調査の成果では中世から近世江戸時代中期にかけての集落跡が確認されている。町内には江戸時代天明年間に酒井氏によって築城された松山城跡があり、大手門・本丸の土手・濠等が現存し、往時をしのぶことができる。相沢川の対岸、北方の丘陵上には中世期の橋跡や、館跡が点在し、その前面となる水田部には村落が営まれており、下餅山遺跡もその一つとなり、江戸時代松山城下の村落として続いてきた集落と考える。



第2図 萩ヶ山遺跡概要図

### III 遺跡の概要

#### 1 遺跡の層序（第3図）

本遺跡は相沢川によって分断された出羽丘陵上に立地し、遺跡は丘陵頂部に存在している。丘陵頂部は馬の背状となり、西側はゆるい斜面を呈している。遺跡の基本層序は事業計画範囲の周辺から求め、第3図に調査区域周辺の壁面を図示した。また、表土を除去した後に面整理を行い、斜面に沿った埋没谷と推定される黒色土が広がっていた。調査区周辺の壁面と、埋没谷の主軸に沿ったラインを層序として計測した。以下に層序について説明する。

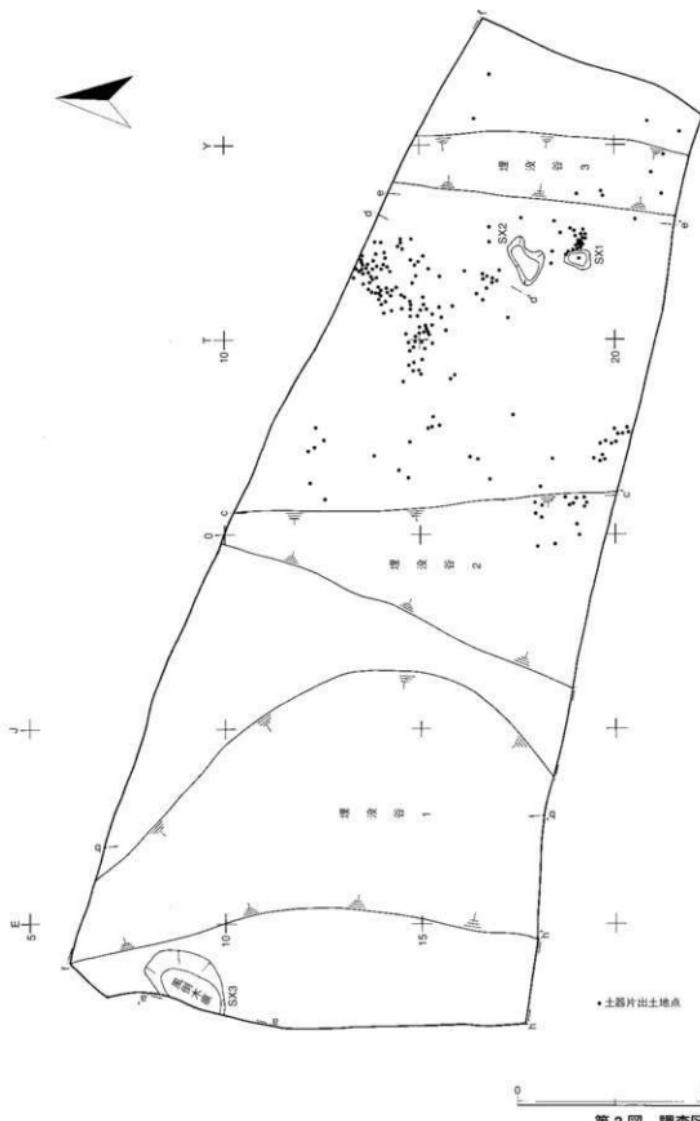
- 第Ⅰ層 黒褐色シルト層 雜木の腐植土が覆い、砂礫を少量含む。表土
- 第Ⅱ層 黒褐色土 やや粘性をもち、粒子が粗い。平安時代の土器片が散乱する。
- 第Ⅲ層 黒色土 粘性を強くもち、粒子が細かい。縄文時代の土器片が散在する。
- 第Ⅳ層 明褐色土 第V層の黄褐色地山との残移層で、縄文時代の石器が出土する。
- 第Ⅴ層 黄褐色地山 各遺構や、掘り込みの壁面をなす。

#### 2 遺構と遺物の分布

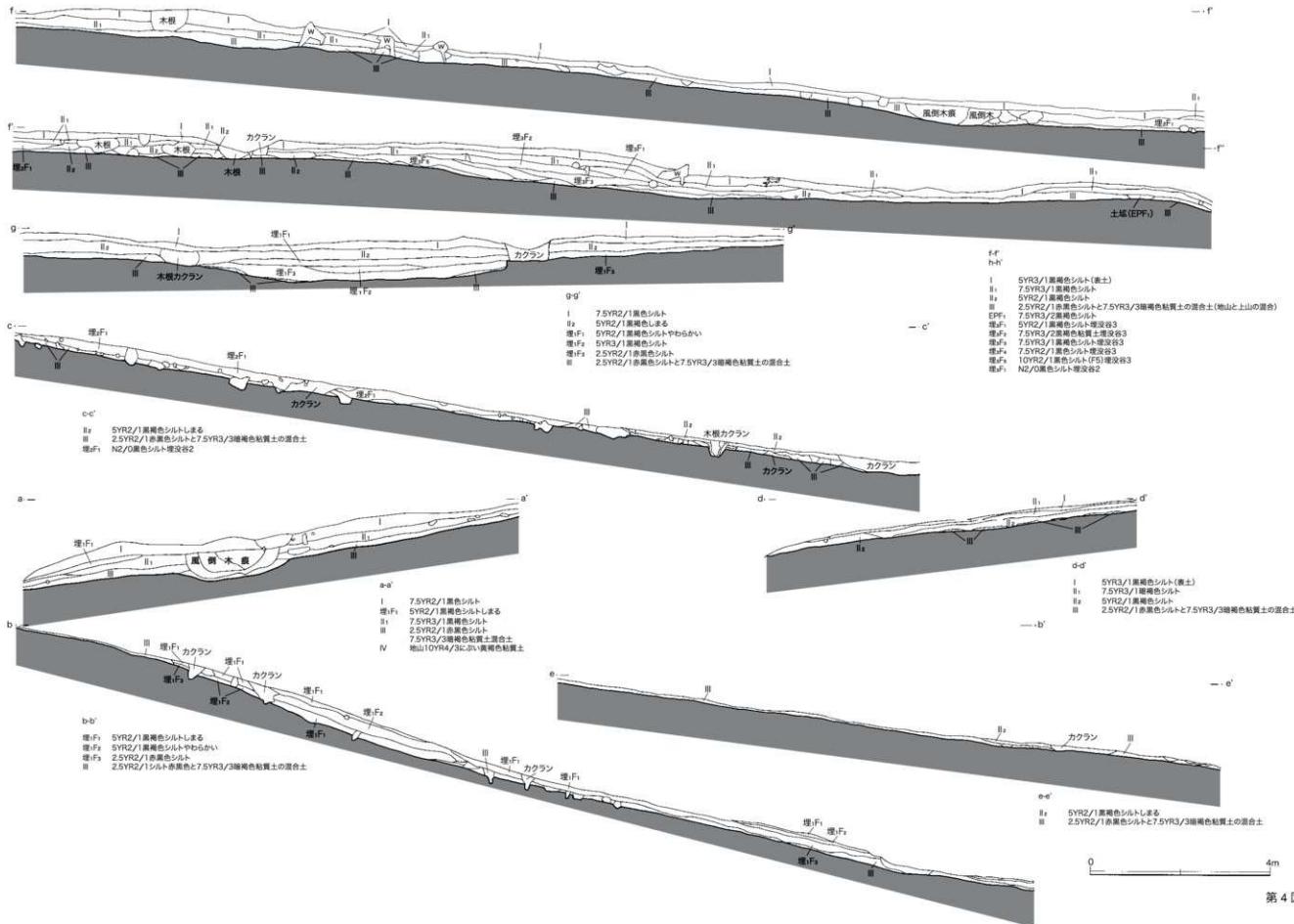
本遺跡の遺構や遺物が分布する範囲は詳細分布調査の内容を加味すると、東西110m、南北120mの総面積約13,000m<sup>2</sup>という広大なものになる。しかし、調査では、原始・古代に営まれた痕跡は検出されず、第4図の調査区概要図では、丘陵斜面に沿った埋没谷が検出された。埋没谷は遺跡が立地する丘陵が創りだす斜面によって形成された、自然の力で作られた地形の変化である。斜面の地表が集中豪雨によって筋間に削り取られ、窪地となり、その上面にその後腐植土が堆積したものと推測できる。また、土坑状に落ち込みが確認されたが、いずれも強風による立ち木の倒壊が要因となる風倒木痕と推測する。

出土した遺物では、縄文土器、石器、平安時代の須恵器、内黒土器、赤焼土器等が出土した。平安時代の遺物は、調査区域となる北側の斜面の上位で出土し、甕・壺・壺等の食膳具の器種が認められた。縄文時代の遺物は、調査区域の南側下位のやや斜面が緩い地域で出土した。土器は、施文された文様に違いがあり、竹管による施文されるものと、撚糸を器面に施した土器がある。これらの土器は文様から時期の違いがあり、この地で営まれた集落が断続的に存在したものと考える。石器の石鎌（第6図26・27）は斜面の下位、縄文土器片と共に地山に張り付くように検出された。第6図25の磨製石斧は、やや中位の斜面からの出土である。

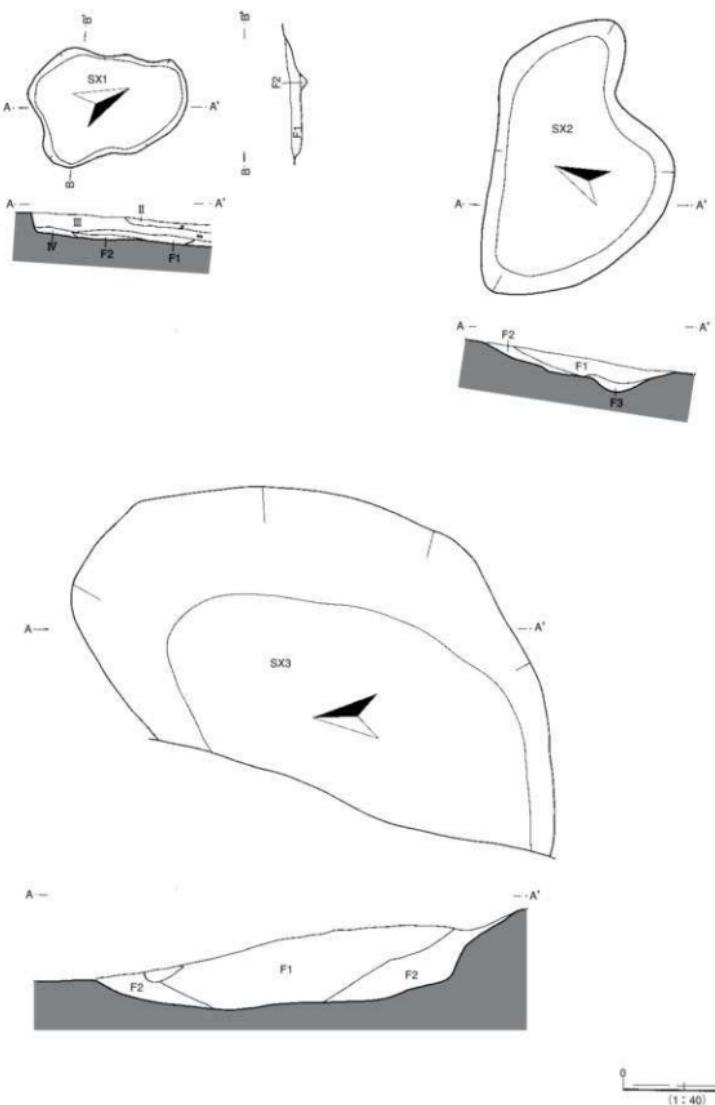
III 遺跡の概要



第3図 調査区概要図



第4図 道路の層序



第5図 SX1・2・3性格不明遺構

## IV 出土遺物

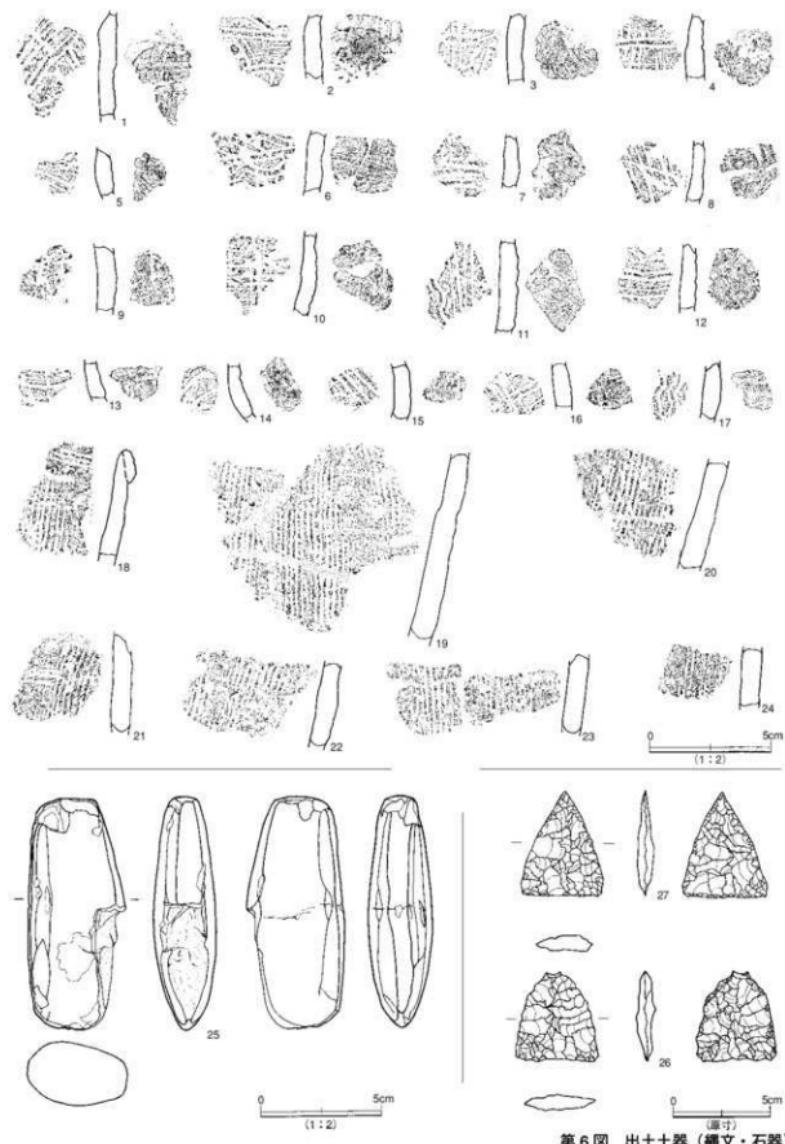
若ヶ山遺跡で出土した遺物は整理箱にして総数6箱を数える。その内訳は、縄文土器が2箱、平安時代の3箱、その他石器・フレーク・種子等である。出土した地域は調査区の北部で平安時代の遺物、南部で縄文時代の遺物が出土している。ここでは、平安時代の遺物から説明する。

### 1 平安時代の土器（第7図）

内黒土器は一点のみの出土である。器種は杯形土器である。3は底部から口縁まで復元できだが、器全体の五分の一程である。器内面には竈状工具によるミガキが施され、炭素吸着による黒色化となる。底部はやや上げ底なり、底部から急激に口縁に立ち上がる。口縁は先端で外反しやや丸みをもつ。ロクロによる成形痕を残し、底部は回転糸切りである。5は須恵器である。壺形土器の破片と推測される。器面には竈状工具の小口による調整が施され、細かな線が平行となる。1、2、4、6、7は赤焼土器である。1、2は杯である。1は底部から体部にかけてロクロ成形により、丸みを持ちながら立ち上がる。口唇部はやや外反し、器面にロクロ痕を残す。底部の切り離しは回転糸切りである。2は底部のみである。回転糸切りによる切り離し痕を残す。4は壺形土器の口縁部である。口縁部が「く」字状に屈曲し、摘み上げて収められる。内外面とも横位にハケメ調整が施される。6は壺の体部片である。外面に竈状工具による叩きが明瞭に残し、内面にハケメ痕を残す。7は鍋形土器の口縁部である。体部から急激に立ち上がり、口縁部で丸くつまみ、口唇で摘み上げて収めている。内外面共に、横位にハケメ痕を残す。器面全体に明瞭なハケメ調整痕を残し、器内面には煮沸による煤が付着している。これらの土器は、10世紀後半から第3四半期の所産と考える。

### 2 縄文時代の土器・石器（第6図）

土器片は総数123片の出土がみとめられた。石器はフレーク1、磨製石斧1、石鏃2である。縄文土器の出土した地域は、調査区域の南部、斜面の下位にあたる。いずれも第Ⅲ層の黒色土で、粘性が強い土質に出土している。ここでは、比較的に拓本で図示できる破片を示した。土器は二つの文様を持つ破片に区別される。一つは撚糸文を主体とする土器群と竹管文を主体とする土器群が出土している。第6図1~17は竹管文を主体とする土器群で、半裁竹管による鋸歯状文や山形文で区画された線を引いている。器形は深鉢となり、胎土に植物繊維を混入し、軽い土器片である。大木5式期併行の北陸系の土器群で、福浦上層式期にあたられる。同図18~24は棒状工具に撚糸を巻きつけ器面を縱位に転がし、撚糸文を施している。器種は深鉢で、一個体となるものと考える。18は口縁部で口縁が折り返され、折り返した部分に撚糸文を横位に施している。



第6図 出土土器(縄文・石器)

出土遺物類型表 (横文上巻)

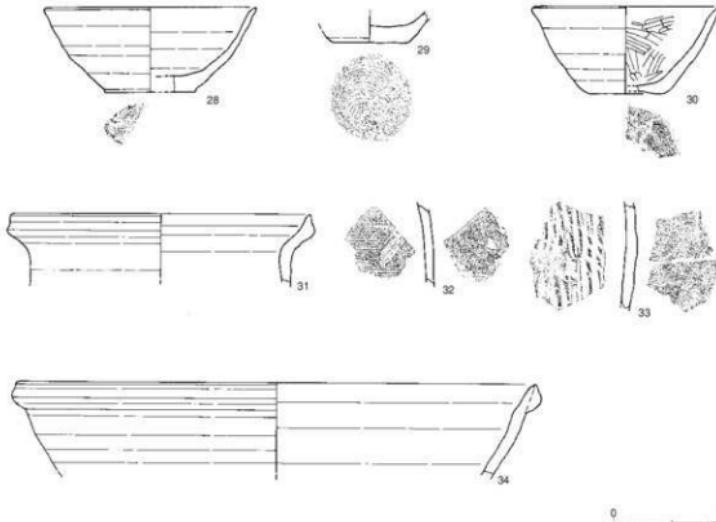
番号 NO.	出土地点 (GP NO.)	種別	器種	胎土	焼成	色調	調整・成形			備考
							U縫部	底部	底部	
1 226	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 5-2	竹脣文	織繩を含む		
2 4	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	黒褐色	Hue 10YR 2-1	竹脣文			
3 10	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	黒褐色	Hue 10YR 3-1	竹脣文			
4 SX 1	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文			
5 11	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	黒褐色	Hue 10YR 5-3	横文 (竹脣文)			
6 224	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文	織繩を含む	226と統合	
7 227	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 5-2	竹脣文	織繩を含む		
9 127	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 5-2	竹脣文			
10 220	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 6-4	竹脣文	織繩を含む	220と統合	
11 227	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	黒褐色	Hue 10YR 2-1	竹脣文	織繩を含む		
12 221	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 4-2	竹脣文	織繩を含む		
13 220	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文	織繩を含む		
14 SX 1-1F1	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	黒褐色	Hue 10YR 4-1	竹脣文			
15 219	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 5-2	竹脣文	織繩を含む		
16 128	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 5-2	竹脣文	織繩を含む		
17 214	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	黒褐色	Hue 10YR 3-2	竹脣文	織繩を含む		
18 1	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-2	竹脣文			
19 20	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文			
20 亂形B	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文			
21 10	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文			
22 8	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文			
23 14	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-3	竹脣文			
24 13	横文字型	深鉢	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 5-4	竹脣文			

出土遺物類型表 (右巻)

番号 NO.	出土地点 (GP NO.)	種別	器種	胎土	焼成	色調	調整・成形			備考
							外面	内面	底部	
25 X-0	磨製石斧	磨石					ロクロ板	刮削痕切		
26 V-16	16 石錐	石錐					ロクロ板	刮削痕切		
27 U-15	15 石錐	石錐					ロクロ板	刮削痕切		

出土遺物類型表 (赤焼土器・内裏土器)

番号 NO.	出土地点 (GP NO.)	種別	器種	胎土	焼成	色調	調整・成形			備考
							外面	内面	底部	
28 亂形B	赤燒土器	杯	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 7.5YR 7-4	ロクロ板	刮削痕切		
29 35	赤燒土器	杯	粗砂泥	真	灰黃褐色	Hue 10YR 7-6	ロクロ板	刮削痕切		
30 36	赤燒土器	杯	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 10YR 7-4	ロクロ板	刮削痕切		
31 25	赤燒土器	蓋	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 7.5YR 7-4	ロクロ板	刮削痕切		
32 107	赤燒土器	蓋	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 7.5YR 7-4	タタ冬	アラ板	293-295°	
33 60	赤燒土器	蓋	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 7.5YR 7-4	タタ冬	アラ板	293-295°	
34	赤燒土器	柄	粗砂泥	真	にい黄褐色	Hue 7.5YR 7-4	ロクロ板	刮削痕切		



第7図 出土土器 (赤焼土器)

## V まとめ

### 1 遺構

本遺跡の調査では、原始・古代の人々が生活を営んだ痕跡は認められなかったが、調査区域では平安時代と、縄文時代の土器片が出土した。出土した状況を見ると調査区の北側で平安時代の土器片が、南側で縄文土器片が散在する。これらは、本遺跡が立地する地形環境によるものと推測できる。丘陵頂部付近に遺跡として認定され、北側が高く、南側が低い地域となっていることからである。調査の対象とした範囲が地形の状況から出土要因となったものと考える。また、立地する地形の形成によって、調査で確認された埋没谷は集中豪雨や降雪の融解により、丘陵の斜面が流路によって削り取られたものと推測する。調査区全面には木根による搅乱や、強風による大木や立ち木の倒壊した、所謂風倒木痕と呼称される自然現象の痕跡が多く見られた。先人が生活を営んだという遺構としての登録されるものは確認されなかったが、遺跡基本層序の第Ⅱ層には平安時代の土器片、第Ⅲ層には縄文時代の土器、石器が出土したことは、調査区域外にそれぞれの時代に生活を営んだスペースが存在し、本遺跡の調査区となった範囲にその証拠となる遺物が散在したものと推測される。調査では遺構の存在はなかった。

### 2 出土遺物

調査で出土した遺物は整理箱にして6箱である。種別は縄文土器・石器、平安時代土器、その他の遺物として、頁岩質のフレーク・種子等である。ここでは、基本層序第Ⅱ層で出土した平安時代の土器、第Ⅲ層で出土した縄文土器・石器を考察する。

平安時代の土器は、須恵器、内黒土器・赤焼土器である。須恵器は壺形土器の体部と推測されるが、小片であることからその形状・時期は不明である。内黒土器は一点の出土であるが、約四分の一の破片である。底部から口縁部までがあり、内面には窓による器面調整の跡が明瞭に残し、炭素を吸着している。時期は10世紀第2四半期に充てられる。赤焼土器は杯・甕・鍋で、煮沸で用いられる土器と、共膳に使われた土器である。杯や甕の形態から時期は10世紀第2四半期に比定される。縄文土器は、煮沸で使用された深鉢形土器で、縄文時代前期後半の時期が充てられる。施された文様は竹箇で、山形や顎歯状に線引きした北陸系の朝日下層式および福浦上層式期に擬えられ、胎土に纖維を混入させたものもある。東北地方南半で比定される大木5式期併行に充てられる。また、同時期であるが、撚糸を軸に巻きつけた多縄文系に伴う土器がある。小さな深鉢で、一固体と思われる。円筒系の文様をもち、縄文前期末の時期に推定され、大木6式期併行に充てられる。石器は、磨製石斧と石鎌2点である。磨製石斧は小型のもので、削り抜いた木にソケット状に差込み、木を伐採する際に使用された石斧である。石鎌は形状が正三角形に近く、縄文早期の多縄文系土器段階に伴うものと推測できる。しかし、本遺跡では、早期の時期の遺物は確認されていないことから今後の検討を要する。

### 3 総括

調査は平成15年度に県農林水産部が計画した、中山間活性化ふるさと支援農道整備事業に係る緊急発掘調査である。調査面積は1000m<sup>2</sup>、調査日数延べ60日間であったが、遺跡は、山形県の母なる川として親しまれている最上川が内陸部を貫流し、広大な庄内平野に注ぎ込み、大きく北方に蛇行する松山町に位置し、遺跡からは庄内平野が鳥瞰できる。調査では原始・古代の人々が生活を営んだ痕跡は確認できなかったが、生活するに必要とされた道具類の破片が調査対象区域に散在していた。一つは、平安時代の食器類である。圓盤等、畑地開発や植物採集で、一時的に営みを行った場所と推測される。しかし、調査対象区域に建物跡等の生活の痕跡が認められないことは、区域外にその場が存在するものと考える。調査区は北から南にかけての斜面が対象であり、北側の高い平坦な地域にその場が存在するものと考える。

縄文時代の土器、石器もその出土状況や要因についても同様である。土器の文様においては、本遺跡は東北南半の文様特徴となる大木型式の範疇に入るが、調査で出土した土器の文様からは、日本列島日本海側の土器様式である北陸地方と東北北部の様式が出土している。一つは半截した竹管を縱方向や横方向に押し引きし、文様を配した竹管文グループと、棒状の軸に撚糸を巻きつけ、器面に縱方向等にころがして文様を付した撚糸文グループである。竹管文を付した土器は北陸系の福浦上層式期に比定され、鎌齒状文や、山形文、併行沈線文を施している。東北南半の大木5式期並行に充てられる。撚糸文を施す土器は、東北北半でみられる多縄文に伴うもので、円筒系の円筒下層d式期併行の大木6式期に充てられる。縄文時代前期末から中期初頭にかけての山形県内ではこの時期には、最上地方で最上町水木田遺跡、舟形町西ノ前遺跡等の数遺跡に出土例がある。村山地方では、村山市落合遺跡、尾花沢市原ノ内A遺跡等、また、置賜地方では、米沢市台ノ上遺跡、小国町谷地遺跡等が挙げられる。庄内地方では、遊佐町吹浦遺跡、八幡町八森遺跡、平田町山谷新田遺跡、鶴岡市岡山遺跡、同西向遺跡、羽黒町郷ノ浜J遺跡等で出土している。このように東北南半に位置する山形県内の各地方には南北両方の文様を施す土器が出土している。縄文前期末から中期初頭の時期にかけて、北陸地方の土器様式を知った人々が、また、東北北部地方の土器様式を知った人々が山形県内の各地方に居住の場を求めたと推測する。また、当該各地方には東北南部を中心にした土器様式をもつ大木式文様の人々が居住していたが、各遺跡の土器には文様、様式に影響を受けた破片は見受けられない。北陸系はこれ、円筒系はこれ、大木系はこれ、とする独自に継承した文様、様式と考える。このことは文様や様式は目で、手で、体で観察し、覚えたものであり、石器の石材のように物の受け渡しとは違って、心や気持ちがおこなうもので精神的な要素と考える。このことは、各地方に着いた来地者が周辺の地形環境や、植生を見定め、自然地形に制約されながらも居住環境を整えていたものと推測される。また、各地に到達する方法としては、基本的には徒歩であるが、山形県内を貫流する最上川がそれを大きく助けている。北陸系の人々は日本海の対馬海流を利用し、庄内海岸に注ぎ込む最上川や赤川などの幅の広い河川や、海岸に注ぐ小河川を利用したものと推測できる。また、最上・村山・置賜地方のそれは、各地方の周辺が周囲を高い山や丘陵に囲まれ、最上川に注ぎ込む中小河川が支流として存在し、川を伝うことで容易に到達することができたものと考える。しかし、在地に居住していた人々もその姿を目にしてい

たであろうと考えるが、土器の文様の観察からは来地者が持つ様式が在地の人々に影響を与えていたとの感は薄い。各地方がもつ伝統性が他地域の土器文様、様式に組み込まれないという社会が存在していた感がある。今後の課題として追求する項目である。

山形県内の縄文前期末や、縄文中期初頭の土器型式・様式の問題については近年発掘調査が相次いで実施され、検討が進められている。本遺跡の出土土器がその一助となれば幸いである。

#### 参考文献

- |           |   |
|-----------|---|
| 野尻 侃      | 1986 「下舞山遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 97 集            |
| 野尻 侃      | 1981 「郷の浜 J 遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 50 集         |
| 渋谷孝雄      | 1984 「「吹浦遺跡」第 1 次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 82 集    |
| 渋谷孝雄・佐藤正俊 | 1985 「「吹浦遺跡」第 2 次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 93 集    |
| 渋谷孝雄・黒坂雅人 | 1988 「「吹浦遺跡」第 3・4 次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 120 集 |
| 佐藤植宏・大川貴弘 | 2003 「「八森遺跡」先史編・先史図録編」山形県八幡町教育委員会                 |
| 須賀井新人     | 2004 「「西向遺跡」発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 130 集      |

その他、山形県内で実施した遺跡で、当該時期の資料を調査した報告書を活用した。

また、北陸地方や東北北部地方での資料も活用したがここでは割愛した。無礼を深謝する。

写 真 図 版

---



調査区近景



重機械稼働状況



表土除去状況



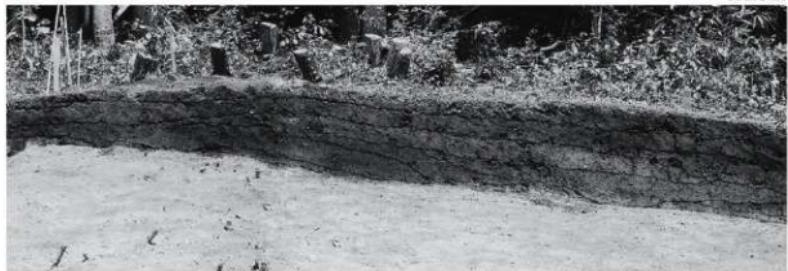
調査区域環境整備



抜根作業風景



完掘状況



遺跡の層序（東壁東西ライン）



遺跡の層序（北壁南北ライン）(1)



遺跡の層序（北壁南北ライン）(2)



赤燒土器集中出土状況



遺跡包含層（南北ライン）(1)



遺跡包含層（南北ライン）(2)



風倒木断面



風倒木完掘



出土状況（RP1）



出土状況（RP2）



出土状況（RP3）



出土状況（RP4）



出土状況（RP5）



出土状況（RP6）



出土状況（RP7）



出土状況（RP8）



出土状況（RP9・10）



出土状況（RP11・12・13）



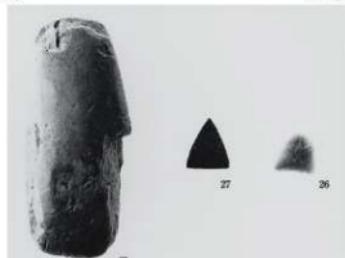
出土状況（RQ15）



出土状況（RQ16）



磨製石斧



磨製石斧・石鋸



赤焼土器・内黒土器（表）



赤焼土器・内黒土器（裏）



赤焼土器（表）



赤焼土器（裏）



繩文土器 捻糸文 (表)



繩文土器 捻糸文 (裏)



繩文土器 竹管文 (表)



繩文土器 竹管文 (裏)



竹管文土器・磨製石斧・石鏽



撓糸文土器・磨製石斧・石鏽

# 報告書抄録

ふりがな	みょうがやまいせきはつくつちょうさほうこくしょ
書名	若ヶ山遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第136集
編集者名	野尻 侃
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL023-672-5301
発行月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みょうがやまいせき 若ヶ山遺跡	やまがたけん 山形県 あくみんくん まつやまち 飽海郡松山町 おおあいみょうがやわ 大字若ヶ沢 あきみょうがやま 字若ヶ山 ばんち ほか 345番地他	06463	平成14年度 登録	38度 52分 32秒	139度 58分 28秒	20030701 ～ 20030829	1000	中山間 活性化 ふるさと支 援農道整備 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みょうがやまいせき 若ヶ山遺跡	散布地	縄文時代 平安時代	埋没谷 性格不明土壙 風倒木痕	縄文土器片 内黒土器(坏) 赤焼土器(坏・甕・壗) 石礫 磨製石斧	縄文土器片では北陸 地方で見られる竹管 文様の土器片と東北 北部でみられる縄文 压痕文様の土器片が 出土し、北と南の文 化が重なった地域と いえる。 (層出土箱数6箱)

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 136 集

## 若ヶ山遺跡発掘調査報告書

2004 年 3 月 31 日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒 999-3161 山形県上山市弁天二丁目 15 番 1 号

電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社  
〒 990-2251 山形県山形市立谷川三丁目 1410-1  
電話 023-686-6111